

母子関係における愛着と依存・自律の関連 —情緒的側面に焦点を当てて—

寺嶋 愛¹⁾・吉岡和子²⁾

〔要旨〕

本研究は、母子関係において形成された愛着が、子どもの依存欲求および依存性、自律欲求および自律性にどのような影響を与えるのかということについて検討した。大学生を対象に質問紙調査を実施し、子どもの頃の母親との関係を想起しながら回答してもらった。安定型、愛着軽視型、愛着恐怖型、とらわれ型の4つの愛着スタイルに分類し、愛着スタイルごとに依存と自律の関連を検討した。

その結果、依存に関して、安定型ととらわれ型は依存欲求が高く、依存性も高い、愛着軽視型と愛着恐怖型は依存欲求が低く、依存性も低いという結果となった。自律に関して、愛着軽視型と愛着恐怖型は自律欲求が高く、自律性も高い、安定型ととらわれ型は自律欲求が低く、自律性も低いという結果であった。このことから、どのような愛着スタイルであっても、母親が子どもの必要に応じて、しっかり子どもと関わり、コミュニケーションを取っていることが、子どもの安心感の獲得につながり、安定した依存や自律が可能となることが示唆された。

キーワード：母子関係、愛着、依存、自律

問題と目的

すべての子どもにとって、親は重要な他者である。多くの研究者が、初期の親子関係が子どもの発達において非常に重要な影響力をもっていることを指摘している。その代表的なものに、Bowlby (1969, 1973) の愛着 (アタッチメント) がある。愛着とは、子どもと養育者との間に形成される緊密な情緒的絆を指す。また、愛着は、人類に普遍的な種の保存と、個の安全と発達のための生得的システムであり、子どもには、特定の対象と愛着を形成し、維持しようとする傾向が生まれつき備わっていると考えられる。未熟な状態で生まれてくる人間の子どものために、養育者と密接な関係を結ぶことは大変重要な意味がある。

愛着研究は、初期には「乳幼児には特定の養育者、すなわち母親がそばにいることが欠かせない」という、母子関係の特殊性、代替不可能性を主張する根拠としてしばしば引用された。その後、研究対象を広げる中で、父子間の愛着や祖母・保育者に対する愛着が研究されるようになった。その結果、父親、祖母、保育者といった母親以外の重要他者も、乳幼児の探索行動や遊びの安全基地として大いに利用されること、その意味で愛着対象になりうることで発見された。このように、現

在、愛着は母親以外の養育者との間にも形成されると考えられているが、初期の愛着研究が示したように、母親との愛着形成の重要性は高いと思われる。例えば、知らない人が抱き上げても泣きやまないが、母親が抱くと泣きやむように、母親に対して明らかに異なった態度を示すようになる。このような乳児の行動は、乳児が母親に対して愛着を形成したからであるとみなされている。また、成長に伴い、母親との身体的な接近だけでなく、心理的な接近に基づいた愛着行動も増加する。乳児の愛着の対象、つまり人間が誕生して最初に愛情で結ばれる相手は、ほとんどの場合母親である。乳児の愛着対象が母親である理由として、二次動因説と母子相互作用が考えられる。二次動因説では、子どもの飢えの動因を、授乳によって低減してくれる母親が報酬価をもつようになり、子どもに母親を求める行動が現れるためとする。一方、母子相互作用の視点では、乳児が生得的に備えた初期の対人行動である注視や微笑や喃語などによって母親を近づけ、それに対して母親が接近し、世話をし、微笑みかけ、声をかけるというやりとりが、愛着形成には欠かせないとする。愛着は、誕生直後の母子相互作用の中から、生後1～2年にかけて発達し、生涯の心の安全基地としての母子の絆を

¹⁾ 福岡県立大学大学院人間社会学研究科 心理臨床専攻 修士課程1年

²⁾ 福岡県立大学大学院人間社会学研究科 心理臨床専攻 准教授

作る。つまり、子にとって母親との関係は特別なものである。また、母親との愛着は永続的に続くと考えられており、母子関係は人の健全な発達において非常に重要であると考えられる。

乳幼児期に形成される愛着関係は、青年の健全な発達においても欠かせないものであり、健全な愛着関係の形成に失敗している場合、それが児童期や青年期の人格形成にとって有害な影響を与える可能性があることが指摘されている (Allen & Land, 1999)。青年期の親子関係においては、心理的離乳や自立・自律が重要な課題であり、子どもが親から分離してくことの重要性が強調される。Hollingworth (1928) は、青年の心理的自立を「心理的離乳」と呼び、すべての青年に「家族の監督から離れ、一人の独立した人間になろうとする衝動」が現れると唱えた。また、青年期は親への愛着と自律性に揺れる時期であり、Blos (1967) は青年が親から心理的に独立する過程を「第2の分離個体化」とよんでいる。この時期の子どもには「自律した個体でありたい」という気持ちと「親と心理的につながりたい」という2つのアンビバレントな気持ちが生じる。かつては、青年期の親との愛着の強さと子どもの自律性は相反するものであると考えられていたが、最近では、親子関係における愛着や親密性は児童期までの親子関係に限らず、青年期においても依然として重要な意味をもっており、青年は親との愛着や結びつきを心の土台にして自立していくとされる (Santrock, 2003)。青年期にあたる学生の中には、親元を離れて一人暮らしをする者が多くいる。そのような学生は、悩み事や心配事がある時、気持ちが不安定な時に、親との精神的なつながりを求め、親からもらった言葉で心を安定させることがある一方で、親に心配をかけまいと、自分自身で解決しようとすることもあるだろう。青年期における親への愛着と自律性との葛藤を実感している学生も多いのではないだろうか。

Steinberg (2008) は、自律性 (autonomy) という概念で心理的自立を整理している。自律性とは、一般に「自分の感情、思考、行動を自分が責任を持ち、自己の規範に沿って統制できること」と定義される。Steinberg は自律性を、個人の親との密接な関係の変化に関する自立の側面を表す「情緒的自律性」、自立した自己決定、意志決定をし、それに従った行動をとれる力を示す「行動的自律性」、道徳的推論や道徳的行動、個人的信念、政治や宗教に関する考えや行動の発達を示す「価値的自律性」の3種類に分類している。本研究では、「情緒的自律性」に注目する。これは、「親への脱理想化」「親を普通の人としてみなすこと」「親への非依存」「個体化」という4つの側面を含む。つまり、子どもが親と自分を区別することで自己を確立し、親に依存しなくなることが情緒的自律につながる。よって、自律性と依存性には関連があると考えた。実際に、かつては、自律性の対極概念として依存性が挙げられることが多く、依存から独立・自律へという発達の方向が暗黙のうちに仮定されていた。しかし、現在の青年心理学においては、もはや自律性と依存性を対極概念とは捉えてお

らず、共存しながら発達していくとされる。適応的な自律とは、他者への適度な依存性を持ちつつ、バランスを保っていることだと考えられる。

青年期以降における依存性は退行的な心性として問題視されてきたため (江口, 1966)、実証研究においては、依存的な人は自信がなく、自己決定できないなど、その病理に注目したものが多く。しかし、自己信頼感や他者信頼感があるからこそ他者に頼ることができると考えれば、健康な日常的な対人関係においては、依存性は病的なものというより、適応的であるという見方もある。これまでの研究から、依存には、「他者との情緒的で親密な関係を通して自らの安定感を得るという情緒的依存」と「自身の課題や問題解決のために、他者からの具体的な支援を求めようとする道具的依存」が存在することが指摘されている。本研究では、「情緒的依存」に注目する。

「依存性」、「自律性」の情緒的な面に注目したのは、母子関係において情緒的なつながりが最も重要だと考えるからである。愛着が「子どもと養育者との間に形成される情緒的絆」とされているように、母親との情緒的なつながりによって、子どもは安心感を得ることができる。その安心感があるからこそ、自身の課題や問題解決のために行動したり、他者関係をつくったりすることが可能になるのではないだろうか。よって、母親との情緒的なつながりは、乳幼児期のみならず、児童期、青年期にわたる自己決定や対人関係の基礎となる、重要なものであると考える。

本研究では、母子関係において、母親との間に形成された愛着が、青年期における母親への依存欲求および依存性、自律欲求および自律性にどのような影響を与えるかを、情緒的側面に焦点を当てて調査することを目的とする。愛着スタイルはFig1に示す4つの型に注目して検討する。実際の依存性と自律性だけでなく、依存欲求および自律欲求にも焦点を当てる理由は、母親との間に形成された愛着の影響で、本当は母親に依存したいと思っても依存できない、あるいは、本当は自律したいと思っても自律できないなど、依存欲求と依存性、自律欲求と自律性が伴っていないパターンが考えられるためである。実際に、子どもの頃に「母親が認めるいい子」としてふるまってきたが、「母親に愛され、ありのままの自分を受け入れてもらった」という安心感を得たことがない、「本当はもっと甘えたかった、ありのままの自分を受け入れてもらいたかった」などの気持ちを抱いている人も少なくないのではないだろうか。このように、母親との関わりにおいて、実際の行動と本当の気持ちが一致していないことが予想される。そこで、依存欲求と依存性、自律欲求と自律性の関連も含めて調査することによって、実際の行動と本当の気持ちとの間に差があるかどうかということも明らかにしていく。

このように、青年期における母親への感情や、母親との関係を明らかにしていくことによって、初期の母子関係の中で形成される愛着が安定していることの重要性や、愛着が子どもの心理的な成長に与える影響を

明らかにしていきたいと考える。

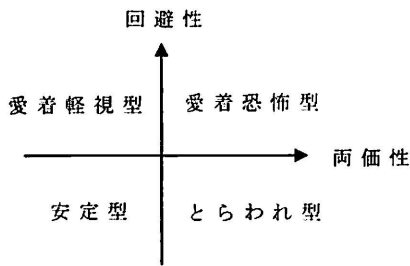


Fig 1. 4つの愛着パターン

<仮説1> 依存について

- (1) 安定型(母親に対する愛着における「回避性」低群「両価性」低群)は、母親との愛着が健全に形成されており、依存を過剰には求めず、必要に応じて母親に依存することができる。よって、依存欲求は低いが、依存性は高い。
- (2) 愛着軽視型(「回避性」高群「両価性」低群)は、母親からの愛情を感じていないため、依存欲求が低く、実際に依存しようとしにくい。よって、依存欲求が低く、依存性も低い。
- (3) 愛着恐怖型(「回避性」高群「両価性」高群)は、母親を過剰に求め、拒否不安が強いため、依存欲求は高いが、母親からの愛情を感じていないので、実際には依存できない。よって、依存欲求は高いが、依存性は低い。
- (4) とらわれ型(「回避性」低群「両価性」高群)は、母親からの愛情を感じており、母親を過剰に求め、拒否不安が強い。よって、依存欲求が高く、依存性も高い。

<仮説2> 自律について

- (1) 安定型(「回避性」低群「両価性」低群)は、愛着が健全に形成されており、母親の存在という安心感のもとで自律できる。よって、自律欲求は高く、自律性も高い。
- (2) 愛着軽視型(「回避性」高群「両価性」低群)は、母親の存在という安心感がないので、自律したいというよりも、自ら母親から離れて自律しようとする。よって、自律欲求は低いが、自律性は高い。
- (3) 愛着恐怖型(「回避性」高群「両価性」高群)は、母親の存在という安心感はないが、本心では母親を求めているので自律ができない。よって、自律欲求は低く、自律性も低い。
- (4) とらわれ型(「回避性」低群「両価性」高群)は、母親の存在に安心感を得てはいるので、自律しようと思えることはできるが、母親を過剰に求めてしまう。よって、自律欲求は高いが、自律性は低い。

方法

<調査時期および調査対象>

2012年11月中旬に、「心理学」の講義を受講している福岡県立大学の学生208名に対して質問紙調査を実施した。

<調査内容>

手続き

はじめに、現在母親がいる、いないを回答してもらい、現在母親がいる方の回答のみを有効回答とした。

1) 愛着について

母親に対する愛着尺度(本多,2002)15項目を過去形の文章に変えて用いた。はじめに、「あなたの子どもの頃(10歳頃まで)を思い出してください。あなたは自分の母親についてどう思っていましたか。また、母親とどのようにつきあっていましたか。以下の質問のよくあてはまるところに○をつけてください。」と教示し、それぞれの項目について、母親との関わりを思い出しながら、4件法で回答してもらった。採点方法としては、各項目について「はい」(4点)「どちらかといえばはい」(3点)「どちらかといえばいいえ」(2点)「いいえ」(1点)として、「回避性」および「両価性」の2つの下位尺度別の合計点を算出した。ただし、逆転項目は4点→1点のように換算してから加算した。

「回避性」は、①母親の利用可能性(ストレス状況において母親を頼ることに対する抵抗、動機づけ)、②母親の情緒的応答性(母親は理解してくれる、母親は愛してくれる)に関する項目であり、「両価性」は、①母親へのとらわれ(母親を過剰に求める傾向)、②母親からの評価懸念(母親から拒否されることへの不安)に関する項目である。

2) 依存について

対人依存欲求尺度(竹澤・小玉,2004)の情緒的依存欲求尺度10項目を、母親を主語にして用いた。はじめに、「以下の文章は、日々の生活の中であなたが感じていることについてお聞きするものです。各文章に関して、理想(本当は～してもらいたい)と現実(実際に～している)について、それぞれあてはまると思う数字に○をつけてください。現在一人暮らしをしている方も、実家にいる時のことを考えてお答えください。」と教示した。それぞれの項目について、理想(以下、依存欲求と示す)と現実(以下、依存性と示す)の2つを6件法で回答してもらった。採点方法としては、「全くそう思わない」(1点)、「めったにそう思わない」(2点)、「まれにそう思う」(3点)、「時々そう思う」(4点)、「しばしばそう思う」(5点)、「いつもそう思う」(6点)とし、理想の合計点と現実の合計点をそれぞれ算出した。

ex.1. 病気の時や憂うつな時には母親になぐさめてもらう。

理想	1	2	3	4	5	6
現実	1	2	3	4	5	6

3) 自律について

Emotional Autonomy Scale (EAS: 心理面の自律性尺度; 以下自律性尺度とする)(L.Steinberg & S.B. Silverberg) 20項目を、母親を対象にした文章に変えて用いた。はじめに、「あなたとあなたの母親のことを考えてお答えください。以下の各文章について、一番近

いと思う数字に○をつけてください。」と教示した。それぞれの項目について、理想（以下、自律欲求と示す）と現実（以下、自律性と示す）の2つを4件法で回答してもらった。採点方法としては、「大変そう思う」（4点）、「ややそう思う」（3点）、「あまりそう思わない」（2点）、「全くそう思わない」（1点）とし、理想の合計点と現実の合計点をそれぞれ算出した。ただし、逆転項目は4点→1点のように換算してから加算した。

ex.1. 私は母親と何でも同じ考えでありたい。

理想	1	2	3	4
現実	1	2	3	4

分析手続き

はじめに、母親の愛着尺度の得点から愛着パターンを「安定型」「愛着軽視型」「愛着恐怖型」「とらわれ型」のいずれかに分類した。愛着スタイルを要因、「安定型」「愛着軽視型」「愛着恐怖型」「とらわれ型」の4つを水準として、「依存欲求」、「依存性」、「自律欲求」、「自律性」の得点それぞれについて、一要因被験者間分散分析を実施した。分析には統計ソフト「STAR」を用いた。

結果及び考察

本研究の質問紙調査では、208名分のデータを得た。その中で、現在母親がいない者が2名、母親がいるかないかの記入がない者が5名、1ページ以上の記入漏れがある者が1名いた。それらの8名分のデータを除外し、200名分のデータを用いて分析した。

1. 愛着スタイルと依存の関連

母親に対する愛着尺度の下位尺度別に平均値を算出し、平均値より大きければ高群、小さければ低群とした。平均値は、回避性が1.99点、両価性が2.00点であった。その2つの下位尺度の得点の組み合わせにより、4つの愛着スタイルに分類した。本多(2002)の先行研究では、理論的な中央値である2.5点より大きければ高群、小さければ低群としたが、本研究では、全体の平均点が先行研究よりも低く、愛着スタイルの各群の人数に偏りが出たため、理論的な中央値ではなく平均値を用いた。それぞれの型は、回避性低群・両価性低群を「安定型」、回避性高群・両価性低群を「愛着軽視型」、回避性高群・両価性高群を「愛着恐怖型」、回避性低群・両価性高群を「とらわれ型」とした。

平均値がちょうど1.99点、2.00点のデータは除外した結果、各群の人数は、「安定型」が50名、「愛着軽視型」が39名、「愛着恐怖型」が50名、「とらわれ型」が43名となった。

依存欲求について、1要因被験者間分散分析を行った結果、4つの愛着スタイルである、安定型、愛着軽視型、愛着恐怖型、とらわれ型の間に有意差が見られた($F(3,178)=8.24, p<.01$)。LSD検定による多重比較の結果、とらわれ型、安定型、愛着恐怖型、愛着軽視型の順に、母親に対する依存欲求の得点が高かった(いずれも $p<$

.05 Fig 2)。

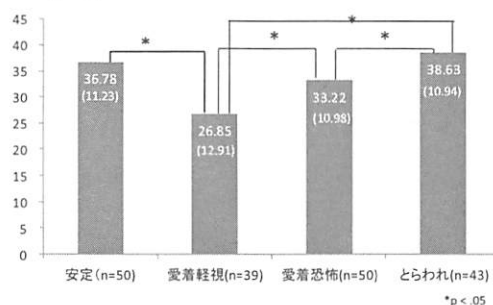


Fig 2. 愛着スタイルごとの母親に対する依存欲求の得点

また、依存欲求の各質問項目と愛着スタイルの関連について一要因被験者間分散分析を行ったところ、項目1~7、10について有意な、項目8、9において有意傾向で主効果が見られた。LSD検定による多重比較の結果、「1. 病気の時や憂うつな時には母親になぐさめてもらう。」「2. いつも母親に見守ってもらおう。」「3. 困っている時や悲しい時には母親に気持ちをわかしてもらおう。」「4. 悩み事がある時には母親にアドバイスしてもらおう。」「5. 何かやろうとする時には母親にはげまされたり気づかしてもらおう。」「7. 母親から「元気？」などの気配りの言葉をもらう。」という項目において、愛着恐怖型と愛着軽視型の間に有意な差が見られ、すべての項目で愛着恐怖型の方が高かった。質問項目を見ると、母親に自分の気持ちを理解、共感してもらい、情緒的なつながりや助けを求めたいというものである。愛着恐怖型は回避性高群、両価性高群であり、愛着恐怖型と比較して回避性が高い点では共通しているが、両価性も高いという点が異なる。同じように「母親を頼ることに抵抗がある」「母親は自分のことを理解してくれない」と考えてはいるが、「母親を過剰に求めたい」「母親から拒否されることへの不安が強い」という面もあり、母親を求める気持ちも強いいため、愛着恐怖型の方が高いという結果となったと考えられる。

依存性について、1要因被験者間分散分析を行った結果、安定型、愛着軽視型、愛着恐怖型、とらわれ型の間に有意差が見られた($F(3,178)=12.59, p<.01$)。LSD検定による多重比較の結果、とらわれ型、安定型、愛着恐怖型、愛着軽視型の順に、母親に対する依存性の得点が高かった(いずれも $p<.05$ Fig 3)。

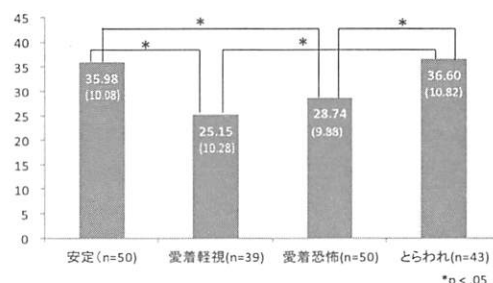


Fig 3. 愛着スタイルごとの母親に対する依存性の得点

また、依存性の各質問項目と愛着スタイルの関連について一要因被験者間分散分析を行ったところ、すべての項目で有意な主効果がみられた。LSD検定による多重比較の結果、「5.何かやろうとする時には母親にはげまされたり気づかしてもらおう。」「7.母親から「元気？」などの気配りの言葉をもらおう。」という項目において、愛着恐怖型と愛着軽視型の間に有意な差が見られ、すべての項目で愛着恐怖型の方が高かった。質問項目を見ると、母親からの温かい言葉かけを求めているものである。愛着恐怖型は回避性と共に両個性も高く、「母親を過剰に求めたい」「母親から拒否されることへの不安が強い」という面がある。そのため、実際に母親からの言葉かけを得て、安心感を高めているため、愛着恐怖型の方が高いという結果となったと考えられる。

安定型については、母親との愛着が健全に形成されており、依存を過剰には求めず、必要に応じて母親に依存することができる。よって、依存欲求は低いが、依存性は高いと仮説を立てて分析を行った。その結果、安定型は、依存欲求が高く、依存性も高いという結果となり、依存欲求の仮説は支持されなかったが、依存性の仮説は支持された。安定型は、回避性低群、両個性低群であり、「母親を頼ることに抵抗はない」「母親は自分のことを理解し、愛してくれる」「母親を過剰には求めない」「母親から拒否される不安はない」と考えている群である。母親との愛着が健全に形成されている場合、母親に対する安心感を獲得できているため、自分の必要な時には母親を頼ることができると考えてことができ、実際に必要に応じて母親を頼ることもできていると考えられる。

愛着軽視型については、母親からの愛情を感じていないため、依存欲求も低く、実際に依存しようとしにくい。よって、依存欲求が低く、依存性も低いと仮説を立てて分析を行った。その結果、愛着軽視型は、依存欲求が低く、依存性も低いという結果となり、仮説が支持された。愛着軽視型は、回避性高群、両個性低群であり、「母親を頼ることへの抵抗がある」「母親は自分を理解してくれず、愛してくれない」「母親を過剰には求めない」「母親から拒否されてもいい」と考えている群である。回避性と両個性がともに高いため母親に対して否定的なイメージを持ち、母親が安心できる存在となっていないため、母親を頼ろうとしない。そのため、依存欲求と依存性が最も低くなったと考えられる。

愛着恐怖型については、母親を過剰に求め、拒否不安が強いので、依存欲求は高いが、母親からの愛情を感じていないので、実際には依存できない。よって、依存欲求は高いが、依存性は低いと仮説を立てて分析を行った。その結果、愛着恐怖型は、依存欲求が低く、依存性も低いという結果となり、依存欲求の仮説は支持されなかったが、依存性の仮説は支持された。愛着恐怖型は、回避性高群、両個性高群であり、「母親を頼ることに抵抗がある」「母親は自分を理解してくれず、愛してくれない」「母親を過剰に求めたい」「母親から拒否されることへの不安が強い」と考えている群であ

る。母親に自分の気持ちを理解、共感してもらい、情緒的なつながりや助けを求めたいという質問項目で得点が高くなってきていることから、母親とのつながりを求める気持ちが強い面があると考えられる。しかし、回避性も高いので、母親に対する安心感が得られておらず実際に母親に依存するという欲求を満たすことができている状況であることが考えられる。

とらわれ型については、母親からの愛情を感じ、母親を過剰に求め、拒否不安が強い。よって、依存欲求が高く、依存性も高いと仮説を立てて分析を行った。その結果、とらわれ型は、依存欲求が高く、依存性も高いという結果となり、仮説が支持された。とらわれ型は、回避性低群、両個性高群であり、「母親を頼ることに抵抗はない」「母親は自分のことを理解してくれ、愛してくれる」「母親を過剰に求めたい」「母親から拒否されることへの不安が強い」と考えている群である。母親の存在が絶対であり、母親から離れることができているため、母親を頼りたいと考え、実際にも母親を頼っていると考えられる。とらわれ型は、両個性高群であり、母親との不安定な関係において否定的な側面を解決しきれていない。そのため、母親に甘え、依存することで、その否定的な側面を解決し、良い母親を見つけようとしているのではないかと考えられる。

以上、今回の研究結果からは、安定型ととらわれ型で、依存欲求が高く依存性も高い、愛着軽視型と愛着恐怖型で依存欲求が低く依存性も低いという結果となった。安定型ととらわれ型については有意な差が見られなかったが、母親に対する安心感の違いはあるのではないかと考えられる。安定型は、母親を心から安心できる存在として捉えているため、母親を肯定的に理解し、信頼感や安心感から、依存欲求が高まり、依存ができていると考えられる。大学生になると、親への反抗や侮蔑といった気持ちが和らぎ、新たに信頼・受容・気づかいといった気持ちが生まれてくると考えられている(落合・佐藤,1996)。母親との関係が安定していれば、その傾向が高くなるため、母親への依存欲求や依存性が高くなったのではないかと考えられる。その一方で、とらわれ型は、母親を否定的に理解しており、反抗や侮蔑などの気持ちが解消しきれていない。その否定的な理解や感情を肯定的なものに変えたい、信頼し、安心できる母親であってほしいという欲求から、依存欲求と依存性が高められているのではないかと考えられる。また、調査対象が本学の学生であったことも理由として考えられる。本学は福祉系大学であり、援助専門職に就くために学んでいる学生が多い。看護師、ソーシャルワーカー、カウンセラーなどの援助専門職は「共依存」の人が多くという報告が以前からなされている。共依存は、様々な問題を抱える「機能不全家族」で育ってきた子どもが陥りやすく、Zupanic(1994)によると、「機能不全家族」は情緒的見捨てられがあり、情緒的欲求が満足されない家族をいう。また、Whitfield(1991)によると、子どもは「自分らしさの喪失」をして、相手の喜びを自分の喜びとして、親子は互いに共依存的となる。母子関係が不安定などの機能不全家族で育ち、

情緒的欲求が満たされないままお互いに依存し合っているなど「回避性は低い」一方で、母親から見捨てられるのではないかと不安を抱くなど「両価性は高い」というとらわれ型の愛着を形成してきたため、依存欲求と依存性が高くなったとも考えられる。

また、愛着軽視型と愛着恐怖型については、どちらも依存欲求および依存性が低かったが、質問項目ごとに比較したところ、愛着軽視型の方がその傾向が高かった。この2つは共に回避性は高いが、両価性の高低が異なる。愛着軽視型は両価性が低く、母親とのつながりを求めたいという欲求が低かったと考えられる。それに対して、愛着恐怖型は両価性も高く、母親との情緒的なつながりを求めているところがある分、得点が高くなったと考えられる。よって、愛着軽視型と愛着恐怖型は同じように母親に対する信頼感や安心感を得られていないが、母親との情緒的なつながりを求める気持ちがあるかどうかという点で差があると考えられる。

2. 愛着スタイルと自律の関連

自律欲求について、1要因被験者間分散分析を行った結果、安定型、愛着軽視型、愛着恐怖型、とらわれ型の間に有意差が見られた ($F(3,178)=10.47, p<.01$)。LSD検定による多重比較の結果、愛着軽視型、愛着恐怖型、安定型、とらわれ型の順に、自律欲求の得点が高かった (いずれも $p<.05$ Fig 4)。

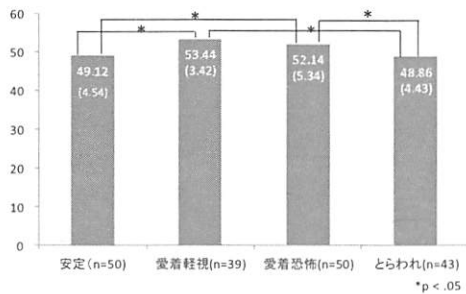


Fig 4. 愛着スタイルごとの自律欲求の得点

また、自律欲求の各質問項目と愛着スタイルの関連について1要因被験者間分散分析を行ったところ、項目1～4、7、11～13、15、17～18、20で有意な、項目14、19では有意傾向で主効果がみられた。項目5、6、8、10、16では有意な主効果はみられなかった。

LSD検定による多重比較の結果、「14. 母親が見ていない時の自分の実態を知って母親に驚いてほしい。」という項目で安定型ととらわれ型の間に有意な差が見られ、とらわれ型の方が高かった。安定型ととらわれ型は回避性が低く「母親を頼ることに抵抗はない」「母親は自分のことを理解し、愛してくれている」と考えているという点では共通しており、どんな自分でも母親は理解してくれるという安心感があるため、この項目での得点が高かったとも考えられる。しかし、とらわれ型は両価性も高く、「母親を過剰に求めたい」「母親から拒否されることへの不安が強い」という面もあり、

どんな自分でも母親には拒否せず受け入れてほしいという気持ちがあるため、このような結果となったのではないかと考えられる。また、「1. 私は母親と何でも同じ考えでありたい。」「2. 自分で解決する前に、まず母親を頼りたい。」「3. 私がいない時、母親はどんなふるまいをしているか知りたい。」「4. 母親と意見が違う時は、いつも母親の方が正しいと思いたい。」「11. 母親とできるだけ同じ意見にしたい。」「12. 母親には仕事をしている時にも同じようにふるまわしてほしい。」「19. 母親に本当の自分を理解してもらいたい。」という項目で、愛着恐怖型と愛着軽視型の間に有意な差が見られ、愛着恐怖型の方が高かった。愛着恐怖型は回避性に加え、両価性も高く、「母親を過剰に求めたい」「母親から拒否されることへの不安が強い」という面がある。質問項目から見ても、母親を絶対的な存在として捉え、母親の意見や理想的な母親像を強く求め、自分の中に取り入れたいと考えているため、このような結果となったのではないかと考えられる。

自律性について、1要因被験者間分散分析を行った結果、安定型、愛着軽視型、愛着恐怖型、とらわれ型の間に有意差が見られた ($F(3,178)=11.10, p<.01$)。LSD検定による多重比較の結果、愛着軽視型、愛着恐怖型、安定型、とらわれ型の順に、自律性の得点が高かった (いずれも $p<.05$ Fig 5)。

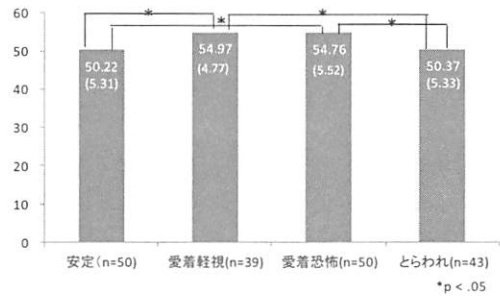


Fig 5. 愛着スタイルごとの自律性の得点

また、自律性の質問項目と愛着スタイルの関連について1要因被験者間分散分析を行ったところ、項目1～2、9、13、15～17、19～20で有意な、項目4～6、18について有意傾向で主効果がみられた。項目3、7～8、10～12、14では有意な主効果はみられなかった。LSD検定による多重比較の結果、「1. 私と母親は何でも同じ考えだ。」「16. 私の母親は、私がいる時といない時では違うことを話す。」という項目で安定型ととらわれ型の間に有意な差が見られた。項目1では安定型の方が有意に高かった。安定型は回避性も両価性も低く、とらわれ型と違って母親と安定した関係が形成されているため、母親への信頼感から「何でも同じ考えだ」と考えられるのではないかと考えられる。項目16ではとらわれ型の方が有意に高かった。とらわれ型は安定型に比べて両価性が高く、安定型よりも不安定な愛着を形成しており、母親を信頼しきれていない面もあるため、このような結果となったのではないかと考えら

れる。また、「3.私がない時、母親はどんなふるまいをしているかわかる。」「8.祖父母の家にいる時、母親はいつもと違うふるまいをする。」「16.私の母親は、私がある時とない時では違うことを話す。」という項目において愛着恐怖型と愛着軽視型の間に有意な差が見られ、愛着恐怖型の方が高かった。項目を見ると、自分の持っている母親像が崩れてしまう場面があるというものである。愛着恐怖型は両価性が高く、「母親を過剰に求めたい」「母親から拒否されることへの不安が強い」という面がある。母親を過剰に求め、母親を絶対的な存在として捉えているため、自分の持つ理想の母親像との違いを感じやすいのではないかと考えられる。さらに、「1.私と母親は何でも同じ考えだ。」「11.母親とできるだけ同じ意見にする。」という項目においても愛着恐怖型と愛着軽視型の間に有意な差が見られたが、こちらは愛着軽視型の方が高かった。このことは、愛着軽視型は回避性が高く、両価性が低いという群なので、その点からは考察しにくい、どんなに愛着が不安定で、母親を頼ることができなくても、だからこそ母親と同じであることで安心感を得ようとするところがあるのではないかと考えられる。

これらのことから、母親が自分とは違う存在であり、自分が持っている母親像が本当の母親の姿ではないかもしれないという、母親の脱理想化に関する質問項目においては、愛着軽視型と愛着恐怖型における自律性の得点が高くなっていると考えられる。しかし、母親に対する安心感を得るために、母親と同じであることを望むのか、脱理想化によって実際の母親像を取り入れようとするのかという点で、愛着軽視型と愛着恐怖型における自律の差があるのではないかと考えられる。

安定型については、愛着が健全に形成されており、母親の存在という安心感のもとで自律できる。よって、自律欲求は高く、自律性も高いと仮説を立てて分析を行った。その結果、安定型は、自律欲求が低く、自律性も低いという結果となり、仮説は支持されなかった。安定型は、回避性低群、両価性低群であり、「母親を頼ることに抵抗はない」「母親は自分のことを理解し、愛してくれる」「母親を過剰には求めない」「母親から拒否される不安はない」と考えている群である。そのため、母親への適度な依存が継続しており、必要に応じて自律ができていないのではないかと考える。安定した愛着関係によって、母親が安心できる居場所となっており、心理的に離れることもでき、母親のもとへ戻ることもできるのではないかと考えられる。

愛着軽視型については、母親の存在という安心感がないので、母親を自ら求めず、逆に離れようとする。よって、自律欲求は低いが、自律性は高いと仮説を立てて分析を行った。その結果、愛着軽視型は、自律欲求が高く、自律性も高いという結果となり、自律欲求の仮説は支持されなかったが、自律性の仮説は支持された。愛着軽視型は、回避性高群、両価性低群であり、「母親を頼ることへの抵抗がある」「母親は自分を理解してくれず、愛してくれない」「母親を過剰には求めない」「母親から拒否されてもいい」と考えている群である。そ

のため、母親に対して否定的なイメージを持ち、信頼感や安心感を得られていないため、母親を頼ろうとせず、心理的に離れて自律に向かうのではないかと考えられる。しかし、母親と意見を同じにするという項目においては得点が有意に高かったことから母親と同じであるということによって安心感を得ようとする面もあり、その安心感をもとに自律しようとしているとも考えられる。

愛着恐怖型については、母親の存在という安心感はないが、本心では母親を求めているので自律ができない。よって、自律欲求は低く、自律性も低いと仮説を立てて分析を行った。その結果、愛着恐怖型は、自律欲求が高く、自律性も高いという結果となり、仮説は支持されなかった。愛着恐怖型は、回避性高群、両価性高群であり、「母親を頼ることに抵抗がある」「母親は自分を理解してくれず、愛してくれない」「母親を過剰に求めたい」「母親から拒否されることへの不安が強い」と考えている群である。母親を絶対的な存在として捉えているため、自分の理想の母親像と実際の母親の姿との違いを感じやすい。そのため、母親の脱理想化という点で自律しているのではないかと考えられる。

とらわれ型については、母親の存在に安心感を得てはいるが、母親を過剰に求めてしまう。よって、自律欲求は高いが、自律性は低いと仮説を立てて分析を行った。その結果、とらわれ型は、自律欲求が低く、自律性も低いという結果となり、自律欲求の仮説は支持されなかったが、自律性の仮説は支持された。とらわれ型は、回避性低群、両価性高群であり、「母親を頼ることに抵抗はない」「母親は自分のことを理解してくれ、愛してくれる」「母親を過剰に求めたい」「母親から拒否されることへの不安が強い」と考えている群である。母親から拒否されることを恐れており、母親を信頼しきれていない面もあるため、母親に従うことで安心感を得ようとして、自律ができていないと考えられる。

以上、今回の結果からは、安定型ととらわれ型については、質問項目による比較から、母親に対する安心感があるかどうかという点では違いがあるのではないかと考えられる。安定型は、母親が安心できる存在であると捉えることができているため、必要に応じて自律に向かうことができると考えられる。しかし、とらわれ型は、母親との愛着関係が不安定であり、母親に自分を受け入れてもらいたい気持ちもあるが、拒否されることへの不安から、母親を絶対視している。そのため、外界に目を向けることができず、自律欲求も自律性も低くなったのではないかと考える。あまりに母親を絶対視してしまい、母親に従っているばかりでは、子どもが心理的に自信をもちにくくなり、結果として自律に向かうことが困難となるのではないかと考えられる。また、前述の依存のところでも考察したように、とらわれ型は共依存の関係に陥っている可能性も考えられ、母子間で依存し合っていることが、自律を妨げているとも考えられる。そして、愛着軽視型と愛着恐怖型については、質問項目による比較の結果、自分と母親が違う存在である、自分の持つ母親像が実際には

違うこともあるという脱理想化という点では、同様に自律の得点が高くなっていると考えられる。しかし、母親との関係で得られていない安心感を補うために、母親と同じであることを望むのか、脱理想化によって実際の母親像を取り入れようとするのかという点では差があるのではないかと考えられる。

まとめと今後の展望

本研究では、母子関係において、母親との間に形成された愛着が、青年期における母親への依存欲求および依存性、自律欲求および自律性にどのような影響を与えるかを、情緒的側面に焦点を当てて調査することを目的とした。

その結果、依存欲求、依存性、自律欲求、自律性のそれぞれについて、安定型、愛着軽視型、愛着恐怖型、とらわれ型という4つの愛着スタイルの得点間に有意差が見られ、安定型ととらわれ型では依存が高く自律が低い、愛着軽視型と愛着恐怖型では依存が低く自律が高いという結果となった。このことから、本研究の被験者は、子どもの頃に形成された愛着スタイルによって、青年期の母親との関係が安定していても不安定であっても、依存や自律ができていていると考えられる。

このことは、初めにも述べたように、依存と自律が相互に関連していることを示していると言える。青年期の自律は心理的離乳と呼ばれ、心理的離乳を妨げる母親の特徴として、母親の所有的態度や過度の支配などがある。また、第2の分離個体化の観点では、青年は、心のなかに内在化された幼児期的な愛情の対象である親からの脱理想化と情緒的離脱によって家庭外の対象に目を向けていく過程を経て、自律性を獲得していく。

本研究においても、質問項目別の分析結果から、愛着軽視型と愛着恐怖型で脱理想化という点における自律が考えられた。本研究の場合、被験者が青年期にあり、母親への脱理想化を行いながら、自律に向かっていたということも、母子関係が安定しているか不安定であるかに関わらず、4つの愛着スタイルにおいて依存と自律ができている理由なのではないかと考えられる。福島(1993)は、特に女子青年において自律と依存が矛盾なく存在し、適度に他者に頼るという相互依存の基盤に立った自律を見出している。このように、母親に対する適度な依存性・自律性を保ちながら、自らの必要性に応じて母親と接することができていると考えられる。

本研究の質問紙は、依存については対人依存欲求尺度を、自律については自律性尺度を用いて、それを依存欲求および依存性、自律欲求および自律性の文章に変更した。そのため、依存については依存性の項目が、自律については自律欲求の項目が、理解しにくかった可能性が考えられる。もう少し、依存欲求および依存性と自律欲求と自律性の違いがはっきりわかるような項目を作成していれば、被験者が混乱することもなく、本研究とは異なる結果が得られたとも考えられる。さらに、被験者の立場に立った質問項目作りが必要であると考えられる。

また、本研究では質問紙に学年、性別を記入する欄を設けていなかった。学年や性別によって、母親のとらえ方や、母親との関わり方が異なってくるため、学年、性別による比較を行うことで、異なる考察が得られた可能性がある。今後、多くの視点から考察を行っていくためにも、質問紙にはできるだけ多くの情報を記入できるようにしておきたい。

さらに、本研究では、子どもの頃に形成された愛着が、青年期に与える影響について検討してきた。その中で、愛着というのは、乳幼児期から青年期、成人期と成長していく過程で、永続的に影響を与えるものであるということを改めて実感した。しかし、やはりその中でも、初期の母親と子どもの関係性が安定しており、子どもが心から母親を安心できる存在であると捉えられていることが重要であると思われた。そこで、今後の研究では、初期に形成された愛着関係と、幼児期、児童期という、その後の対人関係を形成していく基礎となる時期の母親の子どもに対する関わり方について検討していきたい。そうすることで、子どもが心身共に健康に成長していくために、子どもが母親を安心できる存在と捉えることができるような母親の関わり方を見出していきたい。

付記

本論文は、2012年度に福岡県立大学人間社会学部人間形成学科に提出した卒業論文を加筆修正したものである。

本論文の作成にあたり、アンケートに協力して下さった皆様に感謝いたします。

文献

- Allen, J. P., Land, D. 1999 Attachment in Adolescence. In J. Cassidy & P. R. Shaver (Eds.), Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications. Guilford Press. pp. 319-335 (大野久 2010 シリーズ生涯発達心理学④ エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 114-133)
- 安藤満代 2004 思春期の親子関係に関する自律性尺度の信頼性と妥当性の検討 群馬保健学紀要 25 : 7-14
- Blos, P. 1967 The second individuation process of adolescence. The psychoanalytic Study of the Child, 22 162-186 (大野久 2010 シリーズ生涯発達心理学④ エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 114-133)
- Bowlby, J. 1969 Attachment and loss, Vol. 1 Attachment. Hogarth Press. (櫻井茂男・大川一郎 2010 しっかり学べる発達心理学(改定版) 福村出版株式会社 112-115)
- Bowlby, J. 1973 Attachment and loss, Vol. 2 Separation: Anxiety and anger. Hogarth Press. (櫻井茂男・大川一郎 2010 しっかり学べる発達心理学(改定版) 福村出版株式会社 112-115)
- 江口恵子 1966 依存性の研究 教育心理学研究 14

- 45-58 (竹澤みどり・小玉正博 2004 対人依存欲求尺度 心理尺度集V 堀洋道 監 吉田富二雄 宮本聡介 編 サイエンス社 146) (平田陽子 2010 青年期における「自立」と生きがい感 一心理的自立と対人依存欲求の観点から— 九州大学心理学研究 11 177-184)
- 福島朋子 1993 自立に関する概念的考察—青年・成人及び女性を中心として— 発達研究 9 73-85 (平田陽子 2010 青年期における「自立」と生きがい感 一心理的自立と対人依存欲求の観点から— 九州大学心理学研究 11 177-184)
- 平木典子・中釜洋子 2006 ライブラリ 実践のための心理学 =3 家族の心理 一家族への理解を深めるために— 株式会社 サイエンス社 5章 78-80
- 平田陽子 2010 青年期における「自立」と生きがい感 一心理的自立と対人依存欲求の観点から— 九州大学心理学研究 11 177-184
- Hollingworth, L. S. 1928 The Psychology of the adolescent. D. Appleton Century Company. (大野久 2010 シリーズ生涯発達心理学④ エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 114-133)
- 本多潤子 2002 母親に対する愛着尺度 心理尺度集 IV 堀洋道 監修 櫻井茂雄 松井豊 編 サイエンス社 172
- L. Steinberg & S. B., Silverberg 1986 The Vicissitudes of Autonomy in Early Adolescence. Child Development, 57 : 841-851 (安藤満代 2004 思春期の親子関係に関する自律性尺度の信頼性と妥当性の検討 群馬保健学紀要 25 : 7-14)
- 緒方明 1996 アダルトチルドレンと共依存 誠信書房 24, 37-38, 157
- 大野久 2010 シリーズ生涯発達心理学④エピソードでつかむ青年心理学ミネルヴァ書房 114-133
- 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究 44:11-22 (上西幸代 2002 母親の態度変化からみた母子関係の発達変化に関する一考察 大阪大学教育学年報 第7号 121-130)
- 櫻井茂男・大川一郎 2010 しっかり学べる発達心理学 (改定版) 福村出版株式会社 112-115
- Santrock, J. W. 2003 Adolescence. Ninth edition. McGraw Hill. (大野久 2010 シリーズ生涯発達心理学④ エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 114-133)
- 澤田瑞也 1995 人間関係の発達心理学 1 人間関係の生涯発達 培風館 82-87
- Steinberg, L. 2008 Adolescence. Eighth edition. McGraw Hill. (大野久 2010 シリーズ生涯発達心理学④ エピソードでつかむ青年心理学 ミネルヴァ書房 114-133)
- 竹澤みどり・小玉正博 2004 対人依存欲求尺度 心理尺度集V 堀洋道 監修 吉田富二雄 宮本聡介 編 サイエンス社 146
- Whitfield, C.L., 1991 Co-dependence. Health Communications (緒方明 1996 アダルトチルドレンと共依存 誠信書房) 渡辺久子 2000 母子臨床と世代間伝達 金剛出版 49-50
- Zupanec, C.E., Adult children of dysfunctional families: Treatment from a disenfranchised grief. Death study, 18, 1994, 183-195 (緒方明 1996 アダルトチルドレンと共依存 誠信書房)